
USA in ゼロの使い魔

作者Lv.3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

USA in ゼロの使い魔

【Nコード】

N1742V

【作者名】

作者Lv.3

【あらすじ】

2011年某日、世界唯一の超大国アメリカ合衆国は突然姿を消した。姿を消したアメリカは見たこともない世界へとたどり着く。そこで待っていたのは知らない国家に異種族、それに魔法！？ USAの新たな開拓がここで始まる・・・かも。

Episode 1 アメリカ合衆国消滅

「何・・・だと・・・？」

部下からの電話を聞いた在日アメリカ合衆国大使ウォーレンは絶句した。日付が変わってしばらく経った頃に電話をよこしてきた。こんな真夜中にかけてくんない！ と怒鳴りつけたが、話の内容を聞いたら世界が止まったかに思えた。

「本日、首都ワシントンD・Cの時間にして正午12時にアメリカ合衆国本土が消滅しました」

テレビを点けてみた。深夜と言えばアニメの時間である。アニメのウォーレンは仕事で疲れているので、録画して休みの日に見ようと思って、深夜のリアルタイムで見るとはなかった。ニュースをやっていた。どうやら五大湖のカナダ側からの中継の様だ。『Lake Ontario』と書かれた看板が見える。で、やっぱり見えるはずの対岸が見えない。霧がかかっているでもなく晴天だ。

画面が変わり、世界各国の株価がとんでもない勢いで暴落しているらしく、各国証券取引所の指数グラフが映される。まるで崖である。その場でウォーレンは倒れた。ニュースはまだまだ続く。

「...アメリカ消滅の一報により、世界各国の市場は崩壊とでも言うべき様相を醸し出しています。株価の下落に歯止めがかからず、下落の勢いはあの大手投資銀行リーマン・ブラザーズ倒産の時を遙かに超えています。...ここで須賀首相が臨時会見を行うとの情報が...」

結果的に言うと、経済は完全に崩壊した。世界各地の米国軍は何とか統制がとれているが動揺が広がっていた。中東諸国ではアメリカ消滅の報道が入ってすぐに歓声が上がった。サウジアラビアやバレーンの国王が廃位されたり、この前に起きた政変の影響で、エジプトが敵国に変わったイスラエルに全方位からの攻撃が仕掛けられ、善戦したものの、事実上の首都テルアビブを占領されてしまった事は後の話である。

日本でも在日米軍の指揮系統が混乱し、それに伴い、九州に中国の人民解放軍が上陸。韓国はすでに北朝鮮軍にソウルを奪われ、略奪の嵐が吹き乱れていた。

もつとも、中国も経済が急激に悪化、史上最大規模のデモが発生し、中国共産党の70年ほどの歴史が終わり、天安門広場の毛沢東の肖像画は取り外され、共産党幹部はそこで処刑された。このようなことがあったため、上陸してきた解放軍はすぐに撤退。日本占領の事態は免れた。

ロシアと政権が変わったイスラム諸国は同盟を締結。ロシアはヨーロッパへのガスの供給を停止。終焉へと向かいつつあったヨーロッパ各国に追い打ちをかけた。更に、ロシア軍は核弾頭をロンドン、パリ、ベルリン、ローマ、アムステルダムなど各国の首都やルール地方やキルナ鉄山といった工業の重要地域、フランスの原子力発電所などに向けた。ヨーロッパはロシア「イスラーム連合」に包囲された。頼みの綱のアメリカは当然いない。

アメリカが消えた地球はどうなったかというところ、中国が覇権を握ると思いきや、共産党が倒れ、ヨーロッパやイスラム諸国を抑えたロシアの一人勝ちとなった。

「一体どういう事なんですか!!」

ホワイトハウスの大統領室に怒号が響き渡る。在米中華人民共和国大使が吼えた。この部屋にいるのは、日本、中国、イギリス、ドイツ、フランス、ロシアの大使だ。各国大使が手で耳を塞ぐ中、アメリカ合衆国大統領ヘンリー・アンダーソンは指を組んだまま微動だにしない。それを見かねた國務長官のキャサリン・ジョーンズは中国大使を宥める。

「大使落ち着いてください。イギリス大使が笑ってますよ」

劉が目を大きく見開いてみた先は在米イギリス大使だった。横にいた在米日本国大使は思わず冷や汗を垂らす。肝心の英国大使は口笛を吹いていた。そして、

「いやいや、相変わらずチャイニーズは血気盛んな野蛮…いや失礼」

「何だと！ メシマズで落ち目のブリテン野郎が!!」

「飯が不味いのは関係ないだろうがボケェ!!」

額をぶつけて睨み合う二人の大使。大使にも選ばれるようなエリートが古典的な不良の喧嘩っばいものをしようにしている光景はかなりシュールだ。なだめようとしたジョーンズは頭を抱える。来栖と在米フランス共和国大使は奥へと引つ込む。見かねた在米ドイツ連邦共和国大使のアルトゥル劉・ベルツと在米ロシア連邦大使が二人を部屋からたたき出す。この二人は大柄で、彼らを軽々持ち上げた。

外では殴り合いが繰り広げられているが、まあ一応は話ができるようになった。

「問題がいろいろありましたが、今回皆さんにお集まりいただいたのは…」

話をしようとするジョーンズをロシア大使が制止する。彼は深呼吸をしてから述べる。

「世界が消えた。いや、アメリカが地球から消えた、というべきか。カナダやメキシコが消えているからな。この国が消えたとなると、今頃は我が国と中国辺りが覇権争いをしているだろうな。まあ、もはや私には関係がないだろうが」

ロシア大使は平然とした様子だった。彼が言い終わると、部屋は静寂に包まれた。各々、自国や残してきた家族や友人の事を考えているのだろう。廊下は知らない。そのうちに、あざだらけの中国大使と英国大使が戻って来た。あくまで睨み合っているが、再び殴り合いになるようなことはないだろう。

そして、沈黙を守って来たアンダーソンが立ち上がる。

「理由については大使が言った通りだ。これを受けて、とりあえず証券取引所を閉鎖して、軍隊を治安維持にあたらせた。マスコミもある程度統制したから、そこまで大きなことは起きていない。が、時間の問題だろう」

アンダーソンは背後へと振り向く。そこには星条旗があった。彼はじっとそれを見つめる。そのアメリカ建国当時とほとんど変わらない、超大国アメリカの象徴を。すると、弱々しそうに来栖が手を

上げる。大統領が後ろを向いているため、代わりにジョーンズが尋ねる。

「何でしょうか、日本大使？」

「いや・・・その・・・、我々のような在留外国人はどうなるのかと・・・。母国を失った私たちには後ろ盾がない・・・。ですから、偏見や差別の対象になってしまうのではないかと・・・。」

なんだか情けない来栖に呆れたフランス大使も続く。

「我々一同はアメリカ政府に在留外国人の保護を申し願いたい。でなければ、我々も相応の覚悟があります」

タレーランは力強く言い放った。モロトフやベルツもうなずく。気まずそうにジョーンズは大統領の方を見る。アンダーソンはまだ星条旗を見つめている。そして振り返って、

「了解している。アメリカ国民も外国人も争っている場合ではない。最新の報告だと、どうやら本当に別世界の様だからな。我々は一致団結しなければならぬ。それで私は考えていたのだが、いっそ外国人全員にアメリカ国籍を与えるのはどうだろうか？」

ジョーンズは驚愕して甲高い声を上げた。英国大使は嫌味っただしそうに耳を塞ぐ。

「何言っているんですか！？ それは不法入国者も含めてのことですか！？」

「ああ、そうだ。彼らを送還する国もないぞ。君は彼らをこの見慣

れぬディストピアの無人島にでも置き去りにする気か？ 人類皆兄弟、仲良くやるうではないか」

アンダーソンはそう言つて大笑いした。大統領とその他では北極とガラパゴスぐらいの温度差があつた。

「いいか、今は悩んでいる時ではない。この世界で我々は生きなければならぬ。私の知る中でここには一つの国しかない。そう、アメリカ合衆国だ。国が一つしかない以上、この大地に立つ者全てがアメリカ人だ。とんでもないことを言う奴だと思つたろう？ だが、君らはどうする？ 反乱を起こしたところで、こちらには軍隊がある。今なら、私にはすべての人間を受け入れる準備がある。君らの採るべき道はただ一つだ」

「本日、連邦議会は満場一致を以つて、全外国人にアメリカ国籍を付与する法案を可決しました。間もなく大統領の会見が開かれます」

テレビのナレーターはそう言った。

大統領の会見の内容は、アラスカやハワイなどの本土以外の領土、もしくは他国との通信が完全に途絶えた事。また、カナダやメキシコが消えた事。これらから、アメリカ本土は地球外の何処かへ転移してしまつたことが推測されるという事。そして、この非常時に対処すべく、望む外国籍の人間全てに、臨時処置として暫定的なアメ

リカ国籍を付与するという事。こういったことがアンダーソン大統領の口から語られた。

アメリカにいた人々は当然大混乱に陥った。カナダやメキシコとの国境、あるいは沿岸部にいた人々はこう言う。「当然辺りが光った」と。そうしたら、見えるはずのカナダとメキシコが忽然と姿を消してしまつたらしい。周囲は海と化していた。

カナダの国境周辺にいた人々は恐怖した。外に出ていた住民たちは一斉に家へと戻つたり、あるいは携帯電話でニュースを見るなどした。

一方、メキシコ国境付近の住民たちは歓喜した。不法侵入してくるメキシコ人たちに心配する必要がなくなったから。コカインの流入を止めることにもなるから。メキシコが消えたのだろうと思つていた人々はメディアを見て顔色が一変する。

人々は一斉に錯綜する。アメリカ人たちは役所へ、外国人達はそれぞれの大使館や自分たちの祖国へ。大使館の回線はパンク状態で繋がらない。祖国へ連絡を取ろうとしてもやはり繋がらない。

一部の者たちがホワイトハウスの前でのデモを計画する。そんな中での大統領会見が行われた。アンダーソン大統領は上で述べたこと以外にも、戒厳令を発動し、人々に必要がない場合は家や宿泊先から出ないように求めた。さらに、各地の警察や軍に街を巡回させ、何か行動を起こすようならば発砲も辞さないことを述べた。ついで、経済の混乱を防ぐべく、各証券取引所も閉鎖することも。また、食料等についてはアメリカ国内で自給できるので問題ない、との声明も発表した。

結果、スーパーなどに殺到する人々はいなかった。投資家たちも素早く証券取引所が閉鎖されたことにより、持っている株がパーになることを防げて一息ついた。が、外国為替取引を行っていた者の一部は、まあ語るまでもないだろう。

工業は大変だった。精密機器が日本やドイツなどから取り寄せられなくなったからだ。持ち前の部品でなんとかするしかなかった。しかし、数か月後には自前でなんとかできるようになったという。まあ、結構劣るのだが。

国籍を付与されるこのことで、外国人達が一齐に自分たちの国の大使館へと向かった。大使館で国籍が付与されるかの審査を行うからだ。不法入国者にも国籍を与えるという寛大なものだったが、自分の身元を特定できる物が何もない場合と犯罪を犯した形跡のある者には国籍は付与されず、それでも放っておくわけにもいかないの、身元が確認できない場合はさらに慎重に調査され、重犯罪歴のあるものは警察の拘置所に入れられることになった。

人々の不満は募る。政府が行った世論調査では、アンダーソン政権の支持率は一時20パーセントを切ってしまった。インターネット上では、デモを呼びかける書き込みが相次ぐ。一部には、大統領を暗殺するなどという不謹慎なものも見られた。テレビでも、批評家たちがアンダーソン政権の面々を無策だと批判する。人々の間の空気が爆発寸前になる中、ここで朗報が発表された。

まず、軍の一部や資産等を失ったアメリカだったが、ただでは起きないのがこの国だ。外国に駐留している第5、第6、第7艦隊を失ったが、外国の持っていた国債を合法的に踏み倒すことができた。結果、地球に戻らない方がいいという事態になってしまったが。つ

いこの前まで債務不履行になるだのと言われていたのが一転して、健全な財務状態になった。

さらに、周辺では様々な資源が発掘された。石油、鉄、アルミニウム、金、銀、銅、白銀その他レアメタル。宝石や天然ガス。埋蔵量は確認されただけで約100年分。非常に豊富で、資源メジャーが大歓喜したのは言うまでもない。環境も、地球温暖化その他環境汚染とは無縁で、それほど遠慮しなくていい。

バツクの資本を失った外国企業をアメリカ企業がおいしくいたただいた。例を述べるなら、破綻していた米国最大の自動車メーカーであるゼネラル・モーターズがトヨタの米国法人を買収。全てではないがトヨタの技術を取り込んだGMは再び息を吹き返した。フォードとクライスラーもこれに続く。他にも、エクソンモービルが同じ石油メジャーで英国のBPを、ゼネラル・エレクトリックが日立やソニーを吸収した。精密部品の供給は止まったものの、こういったことは大きかった。

閉鎖していた証券取引所を再び解放すると、株価は大暴騰。トヨタを買収したGMはもちろん、未だ国営化されていた大手保険会社アメリカン・インターナショナル・グループ（AIG）も復活。かつての勢いを失ったシテイグループやゴールドマン・サックスなどの金融機関も前以上の強盛を誇った。気づけば全米が好景気に沸きあがっていた。バブルになりかけたが、アンダーソン大統領が抑制した。

宗教関係も世界が変わったのでまあいいか、というような空気になり、イスラームとユダヤ教の和解が始まりつつあった。国家の大危機と銘打って、政府によるキャンペーンが繰り広げられたので、有色人種への差別も減って行った。

この間わずか3か月で状況が逆転した。最大手調査会社ニールセンの世論調査では、一時期20パーセントを切ったアンダーソン政権の支持率は80パーセントを超えた。景気が良くなれば、すべてよしという事だろう。まあ、アンダーソンの機転のおかげなのだが。

という訳で、地球の情勢が悪化したにも関わらず、アメリカは史上最高の、ゴールドラッシュや第一次世界大戦後の好景気を超える、空前絶後の大興奮に包まれていた。

この世界はディストピアではなく、落日のアメリカ合衆国を再びのし上げたユートピアだった。

アメリカ航空宇宙局（NASA）は人工衛星 1 を打ち上げた。これによって、飛ばされてきた異世界の全貌が見えてきた。アンダーソン大統領はまず西側の国と交渉することにした。

Episode・2 未知の国

史上最大のビッグウェーブに乗っているアメリカはこの世界に来て初めて人工衛星を打ち上げた。そのほかにも、アメリカ大陸をくまなく調査した結果、この星の詳細が判明してきた。

惑星の表面積は地球の2倍と非常に巨大。当然岩石型惑星。空気中の成分も酸素と窒素でほぼ構成されていて、有毒な気体はなく、人類の生命活動に問題はない。特記事項は二酸化炭素の含有量は、地球の産業革命以前の値とほぼ同等。オゾン層も破壊されていない。海洋汚染もなし。

自転周期は約24時間、公転周期も384日とそこまで地球と変わらない。特筆すべきは衛星が二つあること。ただし、潮汐力などに問題はない。重力等も問題なし。

大陸はアメリカ大陸を含めて全部で六つ。詳細は多くは不明だが、アメリカ大陸西方の亜大陸に都市を発見、文明のレベルは20世紀前半から我々と同程度と思われる。これを受けて、アメリカ合衆国大統領ヘンリー・アンダーソンはこの地域に使者及び艦隊を派遣することを決定した。

アメリカ大陸と発見された亜大陸の間の大洋 彼らの付けた名称はアメリカ洋 を突き進むのは、アメリカ海軍が現在有する最大の原子力空母ニミッツ級一番艦ニミッツに乗るブライアン・バンバースカーク中将率いるアメリカ海軍第三艦隊だ。

今日は晴天で海も穏やかなので、甲板に出て、前の世界にはいなかった生物がいるかもしれないと持ち場をサボっている兵員が多かった。バンバースカーク中将も、久々の出動のためと見逃していた。

巨大空母が率いる大艦隊はまさに圧巻だった。青の中を切るように進む灰色の軍勢は芸術と言ってもいいかもしれない。

途中に造った軍港を経由しつつ亜大陸を目指すこと2日ほど。その辺で採れたという変な魚を調理した（害がないことを確認済み）フライを朝食として食べようとしていたバンバースカーク中将の下に船員がやって来た。どうやら相手方の戦闘機がやって来て警告をしてきたらしい。

「んで、敵意はないことはあちらに伝えたい？」

「ええ。そうしたら、向こう方の船が港に案内する、とのことす」

「戦闘機ねえ。どんな感じの？」

くしゃくしゃの白髪頭を掻きながら、フライをパンにはさんで食べるバンバースカーク。地球では採れない魚らしいがなかなかうまい。

「ステルス性能があることは確認できましたし、200ノットは出てましたね」

「ふーん。なかなか軍備をお持ちの様だ。まあ、ついてからの事は大使様たちがやってくださるだろうからいいだろ。君もどうだい？ このフライ。なかなかイケるぞ」

「……遠慮いたします」

フライの中身が青色をしていたからだ。

この後やって来た船に案内されて先方の港に到着した。

「この世界にこのような艦隊を持つ国があったとは……。でも、衛星写真にはそんなものなかったはずだが。まあ、何はともあれ歓迎いたしますぞ、文明国の皆さん」

降りてきたバンバスカーク中将と全権大使のデイヴィッド・スチユアートたちは背広を着た中背中肉で金髪、肌の色の白い男と港に駐留していると思われる現地の軍人たちに出迎えられた。男の口調はまさに驚愕という感じで、周りの兵士たちも珍しそうにこちらを見ている。

「この国の向かい側の大陸から参りました、アメリカ合衆国全権大使のデイヴィッド・スチユアートと申します。こちらは第3艦隊の

司令官であるブライアン・バンバスカーク中将でございます。急な訪問、誠に申し訳ない。ですが、どうぞよろしくお願いしたい」

スチュアートとバンバスカークが礼をする。

「いえいえ、こちらこそ。アルカート王国外務省のカール・エステルマンです。今回、皆様方をご案内するために参りました。そういえば、言葉が通じるみたいですね」

エステルマンも礼をして、二人に握手を求める。スチュアートとバンバスカークはそれに応じた。腰の低そうな男だ。エステルマンに案内され、アメリカ使節団は準備された車にのる。白塗りのリムジンである。こちらでは、公の場では白が好まれるらしい。エステルマンのスーツも白である。

リムジンは軍港を出て進む。森の中の様だがきちんと道路は整備されている。スチュアートとバンバスカークは車内で水を出された毒ではないかと疑ったが、エステルマンがボトルの中の水をコップに注いで飲んだので、二人も水を頂くことにした。

「それで、エステルマン殿。このアルカート王国の情報を頂きたいと思ってます。まあ、文字は違うでしょうから口頭でお願いできますか？ 当然、こちらの事もお話しします」

スチュアートがエステルマンに尋ねる。彼は笑みをたたえながら語りだした。

「我がアルカート王国は人口約5600万の立憲君主国です。現国王はグスタフ7世陛下であらせられます。国王陛下は我が国の平和

と統合の象徴として君臨なさっていて、主権は国民にあり、間接民主制を取っています。いかがですか？」

「貴族などは？」

「いますよ。男爵、子爵、伯爵、公爵の爵位があります。もともと今は特権などはなく、すべての国民は平等。お飾りみたいなものです」

話を聞く限り、地球の国家と似たような政体らしい。スチュアートは安心して黒革のシートに身をゆだねる。

「通貨単位はクローネ、補助単位はオーレ。クローネは不換紙幣です。経済規模は約1兆6000億クローネです。おたくの通貨とのレートが分かりませんが、結構豊かな国ですよ。というか、この世界では飛びぬけて最高の国家でした」

さつきから近代国家は自分たちだけでも言いたそうな発言をしている。バンバスカークはそれについて聞く。

「あなた方以外の国家はどのような感じですか？」

エステルマンは首を横に振って、バカにした感じで言った。

「ああ、どの国も未だに民主主義の境地に辿り着けていない野蛮な国ばかりですよ。この世界には我々以外の蛮族も住んでいますね。ああいやだ。彼らは封建制度から脱した我々の方を野蛮だと思っている始末。興味もないので私も細かいことは分かりませんが。大半の国民もそうで、この世界の事は衛星写真でしか分かってないんですよ。この点は非常にお恥ずかしい」

「この国は今まで一国でやって来たんですか？」

「幸い、我が国はある程度広く、土地も肥えていて資源も豊富。ずっと内需でやって来たんです。いや、うちの外務省は閑職ですね。まともに話せる相手は初めてです。それであなた方は？」

エステルマンの語ったことをパソコンに打ち込んでから、彼にも自分たちの事を伝える。彼らもパソコンらしきものを持っていて、そこにまとめていた。

森の中を抜けると開けた丘に出た。そこからニューヨークとはいかないものの、それに準じるくらいの高層ビル群が見えてきた。

「遠い所ご苦労様です。アルカート王国内閣総理大臣アレクサンデル・エリクソンと申します。以後お見知りおきを」

リムジンが向かった先は首相官邸である。この国は現在休日であり、リムジンからも多くの人々が窺えた。ダウンタウンを抜け、官庁街に入ると、休日とあって人がまばらだった。

辿り着いた官邸は近未来的な高層ビルだった。このビルはこの都市で二番目に高いビルらしく、高さは300メートルほどは有るよ

うに思える。この建物には公邸だけでなく、他の省庁も入っているらしい。現在アメリカ使節団がいるのは首相執務室である。黒い絨毯が敷かれ、両脇の本棚には本が敷き詰められており、このほかには首相の執務机と椅子、その背後の国章の両脇に置かれた観葉植物しかない。スチュアートやバンバスカークは大統領室には入ったことではないものの、噂の通りの造りだとしたら、それよりもシンプルな部屋である。

スチュアート大使はエリクソン首相に一応礼儀として親書を渡す。当然読めないのでスチュアートが読み上げた。

エリクソンとの対談後、国王の住むヘードマルク王宮へと招かれ、国王グスタフ7世に謁見。その後一通り街を回った結果、地球とほとんど変わらない文明であることはよく分かった。デパートがあり、そこで家族の微笑ましい様子や独身らしき女性がブランド物の商品を見定めている様子。通りには人や車が溢れ、歩くもの、適当に腰掛けられそうな場所に座っている者、ゲームをしたり漫画や小説を読んでいる者がいる様子。こんな所だろうか。

アメリカ合衆国使節団が帰国してから1週間後に、アルカート王国のアレクサンデル・エリクソン首相を含めた外交団が来訪。その場で国交締結となった。同じ白人国家とあってアメリカ国内ではこのことを歓迎を以って受け入れられた。一方のアルカートもこの世界で初的外交関係締結とすることで国民の関心は非常に高く、一部で脅威論も見られたがおおむね肯定的な評価だった。

軍事同盟についても議論が重ねられたが、アルカートから見て脅

威になるのはアメリカだけであり、逆もそうだとこのことで、アルカートは自国を海賊か何かから守るための最小限度の部隊しか持っていなかったが、同盟締結については延期となった。

文明レベルについてはほぼ同等だった。科学の面では、アメリカがIT技術や宇宙工学、軍事技術などで先を行くが、アルカートは生物学や物理学、地学などでアメリカを上回っていた。医学に関しては似たようなものだったが。経済では、アルカートは外資に遭遇したことがないので、地球で他国の企業を乗っ取りまくってきたアメリカ企業に食い尽くされてしまうと思われるが、やっこのことで為替レートを合わせてみると、アルカート企業の時価が凄まじく、あまり買収できなかった。よって、資本提携等で提携をしていった。ちなみに、1US\$≒約0.5クローネである。

国交を締結して3か月後には、アメリカ最大の金融センターであるニューヨークのジョン・F・ケネディ国際空港からアルカート首都ヘードマルクのオスカル2世空港への便が就航した。就航したての時は両国間の往来が激しかったが、今は落ち着きつつある。

アメリカもアルカートも基本的に白人の多い国家なので有色人種は目立つ。転移後も有色人種の差別はあったものの、転移前よりはだいぶ改善された。それどころではなく、連邦政府も今まで以上に対策を行っているからだ。アルカートには肌の色や宗教、言語、性別による差別は全くない。ただしこの国にも差別はある。今まではアルカート人以外を、アメリカが転移してきてからは自国とアメリカ以外の人種を軽蔑していた。アルカート人は彼らを、文明を持たない野蛮な下等生物とみなし、たまにやって来る周辺の民族を徹底的に痛めつける。その話は、極右のアメリカ人でさえも批判するよくなものだった。

2か月後にはアルカート国王グスタフ7世が来訪。その際に雪だるまの格好をしてきたため、出迎えようとしたヘンリー・アンダーソン大統領以下米政府関係者やアメリカ国民は一斉に引いてしまったが、すぐに笑いに包まれた。その後さっそく、グスタフ7世はアメリカのニューズ雑誌であるタイム誌の表紙を飾った。

両国の関係は破竹の如く進展していく。国交樹立から1年、すなわち転移してからも約1年が過ぎた……。以下は、インターネット上で確認できたデータである。

アルカート王国 人口約5600万の立憲君主国。首都はヘードマルク。憲法は、以前は欽定憲法だったが、民定憲法である現行のアルカート王国憲法。国家元首は、ホーエンベルク王朝第75代目のグスタフ7世国王。首相はアレクサンデル・エリクソン。面積は約400万平方キロメートルの亜大陸。通貨はアルカート・クローネ（ASK）。GDPはおよそ1兆6200億ASK。両国の関係者の努力の末、最近確定された為替レートで換算した場合、約3兆2000億US\$、一人当たりにして60000ドル（いずれも購買力平価に基づく。アメリカは一人当たり48000ドル。ちなみに日本は約34000ドル）。

議会は定数150の貴族院（上院）と定数300の庶民院（下院）の二院制だが、恩赦や受勲などを除いて、下院の優越が憲法で規定されている。与党はアルカート国民党と公正党の連立政権。

資源としては現在のアメリカと同様にほぼ全てのものを自給できる。軍については周りに敵対勢力がほとんど見当たらなかったため、最

低限度の陸海空防衛軍のみが置かれている。ただし、いずれも最新鋭。なお、核兵器については製造はできるものの必要性がない為作られていない。原子力発電所は存在する。工業技術においては、アメリカに劣るものもあるが、逆もあるため、ほぼ同等。

兵員については徴兵制ではなく志願制。ただし、臨時動員法によって、有事の際は徴兵制に変更できる。総員は約8万名。

アルカートの各都市はリアモーターカー及び飛行機で結ばれている。当然のことながら、幹線道路も通っている。首都ヘッドマルクの人口は700万。第2の都市であるヴェステロースの人口は500万。

酪農業、漁業も盛んであり、アメリカのような大規模生産はあまり行っていないが、食品の一つ一つの質が高い。気候は亜熱帯から冷帯まで存在し、幅広い農作物の収穫が可能。

代表的企業は、アメリカのゼネラル・エレクトリックに匹敵するコングロマリットであるマスター・インダストリアル・グループ（MIG）と同国最大の銀行持ち株会社のJ・S・ユーハンソンと、二位で現国王が筆頭株主のロイヤルバンク・オブ・アルカート（RBA）、大手食品メーカーのアレニウス・フーズ、鉱物メジャーのミッドガルド・エネルギー・アンド・メタル（MEM）などがある。

宗教についてはミトラル教という多神教が最も多いが、信徒は500万人ほど。憲法と法律によって非常に厳しく政教分離が定められているため、宗教と政治家が交わることはめったにない。

行政区分は、ヘッドマルク特別行政区と25の州、3の自治区に分かれる。

周辺諸地帯にまったく興味がなく、交流を持っていない。結果、周囲の情報が皆無である。アメリカが初の国交樹立国である。

特記事項は、アルカトは50年前に転移してきた国家である。

Episode 2 未知の国（後書き）

改良した方がいいと思われる点がございましたら、どうぞお申し付けください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1742v/>

USA in ゼロの使い魔

2011年8月5日17時48分発行